

巻頭言

真理を保持する大切さ

LCJE ニュース編集長、ライフ・イン・メサイヤ・インターナショナル日本委員

石黒 イサク



初代教会の時から現代にまで、信仰者たちの群は絶えず、さまざまな攻撃に耐えてきました。新約聖書の書簡には、くり返しその事が記載されています。迫害などの外部からの攻撃は、厳しく辛いことではありましたが、多くの殉教者たちを出しながらも、信仰を強め、愛を成長させて群の団結と、主に対する忠誠を確立する一助となりました。しかし一方で、内部からの攻撃と呼ばれる偽りの教義の侵入や、人間関係の問題などは群を分裂させることになり、福音宣教の大きな妨げ・つまずきとなってしまいました。

2017年に世界各地において、宗教改革500年の記念行事が行われたことは、読者の皆様の記憶にあると思います。宗教改革の三原則は「恵みのみ、信仰のみ、聖書のみ」でありました。つまり宗教改革者たちは新しいモノを入れたのではなく、真理の基本に復帰しただけです。

「恵みのみ」とは、私たち罪人の救いは、人間の行いや条件によらず、ただ無代価の神の恵みの賜物であること。「信仰のみ」とは、ただ信仰によって神の恵みを受け取る者が救われるということ。そして「聖書のみ」とは、完成された旧・新約聖書のみことばだけが、神の啓示であるということで、他のいかなるものも聖書と同等の権威として用いてはいけないということでした。

残念ながらキリスト教会の歴史を見ますと、いつの時代でも真理と偽りの戦いがあり、信者間の愛と一致に対する大きな問題が、継続して起こっています。つまり主イエス・キリスト様を信じる私たちすべては、常にこの問題に対して目を覚まして、聖書に従っていないといけないということです。

イスラエルのメシアニック会衆にあっても、中国の地下教会でも、クリスチャン人口の多い韓国においても、神様の素晴らしい働きが拡大しているところにおいて、必ずサタンの攻撃であるこの問題がくり返し起こってきています。私たちは福音宣教に忠実に関わっていかなければなりません。同時に聖書のみことばをしっかりと学び、この内部抗争というものに勝利していかなければなりません。

私は浅学非才で、無き者のごとき小さな一人ですが、一般人のみならず、正統派のユダヤ人の学者から、リベラルな異邦人の政治家まで、誰にでも堂々と福音を語ることもできるのは、神様の恵みにより、聖書の権威に立っているという確信をいただいているからです。

使徒パウロは、ガラテヤ書1:6-9で「…我らにもせよ、天よりの御使いにもせよ、我らのかつて宣伝えたることに背きたる福音を宣伝する者あらば、呪われるべし。…」と記しています。そして使徒ヨハネは、聖書の結びの黙示録の最後に、「もし之に加うる者あらば、神はこの書に記されたる苦難を彼に加え給わん。もしこの預言の書の言を省く者あらば、神はこの書に記されたる生命の樹、また聖なる都より彼の受くべき分を省き給わん。」(黙示録22:18-19)と記載して、靈感された聖書のみことばに対して、追加も削除も、一切の変更を禁じています。

私たちの対峙する異端や、信徒間の多くの問題は、常に人から出ているモノで、聖書を使用しているながらも、聖書以上に人や組織などに権威を持たせることによって、真理から逸脱してしまうところがその原因なのです。

真理とは、民族や習慣などに左右されたり、時代や場所によって変更されたりするものではなくて、神様の御前で聖書の大原則によって確立され、保証されているものがあります。預言者イザヤも「…民(イスラエル)は、己の神に求むべきにあらずや。…ただ律法と證詞(聖書)とを求めむべし。彼等の言うところ、この言にかなわずば、晨光あらじ。」と明確に指示しています。どれほどの学者の研究や知識であっても、予言者や霊媒師の言葉や不思議な事象であっても、聖書のみことばに従わないもの、反するものであれば、それは神様からのものではありません。

私たちはユダヤ人宣教という、とても重要な使命においても、また家庭や職場、教会生活においても、この大原則を常におぼえて、歩んでまいりましょう。

Networking Jewish Evangelism	
LCJE	
P2▶4	
NAR運動	LCJE 日本支部
P5	
シオンとの架け橋	石井田 直二
P6	
アルコ・イリスミニストリーズ	早川 衛
P7	
ハティクバ・ミニストリー	高瀬 真理
P8	
お知らせ	事務局より

ティクーンの教理は何を教えているか (第1回)

スカット・デイビッド・コングリゲーション長老 シモン・アミット 翻訳：佐野剛史

LCJE 日本支部は、『Tikkun Doctrine, A Critical Survey』を日本語に訳し、読者の皆さまにお届けすることにしました。その背景について、ご説明します。

現在イスラエルのメシアニックジューが直面している神学的課題は、主に2つあります。

- ①メシアニックジューのユダヤ人としてのアイデンティティに関する課題。これは、メシアニックジューは、トーラーやユダヤ教の律法とどのように関われば良いのかという課題です。
- ②NAR(新使徒的宗教改革)運動に関する課題。これは、メシアニックジューの間にも広がりつつあるNAR運動をどう評価したらよいのかという課題です。今回ご紹介するレポートは、②NAR運動に関するものです。

現在、イスラエル国内のメシアニックジューたちの間では、NAR運動が主張する教理について深い懸念が生まれつつあります。メシアニックジューのリーダーたちは、NAR運動(特に、イスラエルにおけるNAR運動)の主張を調査し、それが聖書的であるかどうかを吟味すべきであるという結論に導かれました。その目的を達成するために、数名からなる調査委員会が結成され、調査が開始されました。調査対象として取り上げられたのは、「Tikkun」ダン・ジャスター代表の教理です。このレポートは、調査委員会が出した第一段階の調査報告で、近い将来、第二段階として、今回まとめられた教理に対する聖書の吟味が行われる予定です。

このレポートは、シモン・アミット長老(the Sukkat David congregation in Jerusalem)がヘブル語で執筆したものを、ノアム・ヘンドレン教授(イスラエル聖書大学)が英語に翻訳したものです。

NAR運動は、LCJE日本支部が単独で扱うには余りにも大きすぎるテーマです。このレポートを日本人信者の皆さまと分かち合うことによって、日本の教会全体を巻き込んだ健全な議論が生まれることを、心から願っています。

LCJE 日本支部 運営委員会

本記事は、著名なメシアニックジュー指導者であるダン・ジャスターが代表を務める宣教団体「ティクーン」の教理を批判的に分析したものです。著者は、公開資料を引用しながら、ティクーンの思想的背景と最終的な目標、今話題になっている新使徒的宗教改革(NAR)運動との関係、ティクーンが推進するTJCII(Toward Jerusalem Council II: 第二エルサレム会議に向けて)運動の背景にある考え方などを分析し、ティクーンという組織をよく吟味するように読者に呼びかけています。

この記事は、半年間(6回)の予定で本誌に連載する予定です。なお、紙面の都合上、翻訳は一部を省略した抄訳となっています。

1. はじめに

近年、イスラエルにある数多くのメシアニックジュー諸団体の間で、「ティクーン(Tikkun)」と「リバイブイスラエル(R revive Israel)」の人々の言動はイスラエルのメシアのからだに分裂を引き起こすという認識が広がっています。この両団体の指導者たちが自分のことを「使徒」や「上級使徒」と呼ぶのはなぜでしょうか。ティクーンは、なぜパチカン(ローマ教皇庁)と関係を持っている

のでしょうか。ティクーンの指導者、ダン・ジャスター(Dan Juster)は、なぜカトリック教徒、正教会、メシアニックジューと協力してTJCII(Toward Jerusalem Council II: 第二エルサレム会議に向けて)運動を立ち上げたのでしょうか。リバイブイスラエルとティクーンは、なぜ使徒の働き15章に見られるような「上級使徒会議(Senior Apostolic Council)」を再び設立しようとしているのでしょうか。

こうした行動の意味は、ティクーンとリバイブイスラエルの使徒たちがつくり上げた神学の中ですべて説明されています。また、ティクーンとリバイブイスラエルの最終目標と、その教えを広めるために設けられたマイルストーン(段階的な目標)についても説明されています。この神学が広まることになれば、イスラエルのメシアのからだに影響があることは必至です。というのは、この教えがメシアニック会衆の独立性を放棄し、使徒の権威に服従することを提唱しているためです。こうした使徒たちは力を合わせ、イスラエルのメシアのからだと全世界の教会に対して霊的権威を持つ「使徒会議」の設立を目指しています。このように言うと「まさか」と思われ

るかもしれませんが、この小冊子を読んでもいただければ、ここで書いたことは現実のことであるということがわかりになると思います。

ユダヤ教の神秘主義では、「ティクーン (tikkun)」は、人や人類本来の生き方を回復する必要性を教える用語で、個人レベルの回復は「ティクーン・ミドット (Tikkun Midot)」、世界レベルの回復は「ティクーン・オラム (Tikkun Olam)」と呼ばれます。「この世界は『壊れて』いて、悪に染まっている。この世界を完全な状態にするには、世界を修復する必要がある。この世界の不正を正す責任は人間にある。そのような世界の修復は、内面の価値観の変化、法律の改正、詩篇を読むこと、祈りを通して実現する。人間が世界の修復に成功する度合いに応じて、待望している贖いの日が近づく。そのような人間の行動によって、贖いが実現する前に完全な世界が到来し、さらには贖いの日を早めることができるのである」

以上が、ティクーンという組織の原動力となっている考え方です。そして、ティクーンが掲げるビジョンの背景にあるのが、「ティクーンの回復の教理」です。この教理は、主イエシュア（イエス）が地上に戻ってこられる前に、イエシュアの再臨を待ち望むしもべたちによって地上に神の国が回復され、しもべたちはメシアの再臨を待ち望みつつ神の国を支え、維持すると教えます。さらに、この神の国が出現することが、メシアが再臨する条件であるとも教えています。ティクーンの創設者であるダン・ジャスターとリバイブイスラエルの創設者であるアシェル・イントレーター (Asher Intrater) は、神の霊的王国の回復、メシアのからだの回復、メシアのからだの中で霊的権威を回復することが再臨の必須条件であり、それなくして主の再臨はないと教えます。人間の行動によって全世界のメシアのからだを回復し、エルサレムの使徒たちの権威を回復することが、主の再臨を早めるために必要不可欠なステップだということです。この贖いと主の再臨が実現するかどうかは人間の行動にかかっているという考え方は、ティクーンの使徒たちの教えと切っても切り離せない関係にあります。

ティクーンの使徒たちの神学は、秘伝的なものではありません。それどころか、自分たちの教理を公に広めており、資料も公開されています。難しいのは、そうした資料を集め、全体像を明確に示すことです。さらに、ティクーンの使徒たちは曖昧な言葉（運動、アライメント、流れ、ネットワーク、関係、領域など）を使うことが多く、教理を明確に理解しづらい一因となっています。

ジャスターは、インターネットから入手できる資料「Tikkun International Story」(P. 2、最初の段落)で、改革派教会で育った自身の生い立ちや、ディスペンサー

ション主義に立つニューヨーク州の宣教団体「Word of Life」のサマーキャンプや聖書学校にも参加したことを振り返っています。この2つの組織（改革派教会と Word of Life）は、終末論に関して異なる見解を持ち、神の計画の中でイスラエルが占める役割について正反対の立場を取っており、対極的な教団教派といえます。そのような述懐を記した後、ジャスターはこのように語ります。「当時はまだ気付いていませんでしたが、この問題にいち早く取り組み、最終的にこのような解釈の枠組みを超越したメシアニックジュー神学を構築するという計画を神は私に用意しておられました」。ジャスターは、福音派の中に神学的な断絶があることを知り、このような一般的解釈を超越した、新しいメシアニックジューによる神学を構築するように神は自分を召しておられると確信したのです。この神学が、後にティクーンおよびティクーンを母体とする諸団体の精神、ビジョンとなっていきます。

2. 背景

この文書の目的は、読者のみなさんにティクーンの使徒たちの教えを提示し、その教えと行動からティクーンという組織を吟味していただくことです。ただその前に、ティクーンの教理がどのような影響を受けて形成されたのか、その背景を知っておくことが大切です。

2.1 「ティクーン」という名前の由来

「ティクーン」という組織名は、使徒 3:21 からインスピレーションを受けて名付けられています。

「このイエスは、神が昔から、聖なる預言者たちの口を通してたびたび語られた、あの万物の改まる時まで、天にとどまっていなければなりません」（新改訳第3版）

この「天にとどまっていなければなりません」とは、時が来てメシアが再臨し、すべて（被造世界、権威、神の国など）を立て直すまで、天がメシアの居場所となるという意味です（一般的な英語訳 [NIV、ASV など] では、この箇所は「whom (the) heaven must receive」と訳されています）。しかし、現代のレストレーション運動の注釈者は、この「天にとどまっていなければなりません」を、なんらかの回復が起こるまで、イエスは天国にとどまらなくてはならない、それまでは地上に戻ってくることができない（再臨できない）という意味だと教えます。メシアの再臨の前に、その前提条件として、なんらかの回復が起こらなければならないと言うのです。一般には、主の再臨の時に回復が起こると教えられますが、現代のレストレーション運動では、再臨の前に回復が起こると教えます。これから見ていくとわかるように、ティクーンの使徒たちは、再臨前と再臨時の回復、そのどちらも信じています。

現代のレストレーション運動の多くは、この節で言われている回復とは、教会がしみも傷もない純潔の花嫁と

して完全な一致を回復することであり、それが主の再臨の条件であると教えます。たとえば、国際使徒連盟(ICA)の創始者の一人であるビル・ハモンは、著書『The Day of the Saints (聖徒の日)』の中で、この聖句を次のように説明しています(P. 125)。「**教会のもとで万物が回復し、教会が神の要求する基準に達した後に、キリストが花嫁のために戻ってくる。**それまで、このレストレーション運動は続きます」(ちなみに、モルモン教会もまたレストレーション主義運動です。モルモン教会は、自分たちの教会は使徒の働きの時代にあった共同体の回復であると主張しており、上記の聖句を現代のレストレーション主義者と同じように解釈します)。

ティクーンの「12の柱(12 Pillars)」という文書には、ティクーンの霊的な奉仕の原則が定義されています。この中の第10の柱は「御国はやがて来る完成の中で表現される」と定義され、その説明の中でジャスターは「…天にとどまっていなければなりません」という使徒3:21の聖句を引用しています。ジャスターは、一般的な解釈に従って「これは世界がパラダイスの状態に回復することを指す」(P.23、4段落目)としますが、さらに続けて「**実際には、聖書を読むと、使徒3:21などの聖句で言われているように、私たちは世界の回復という意味合い以上の何かもっとすばらしいものに向かって進んでいることがわかる**」と力説します。ジャスターはその後でこのように書いています。「**こうしたすべてのことは、リバイバルと弟子訓練によって、信者のからだが完成するというすばらしい希望を与えてくれます。そのようなキリストの花嫁だけが、イスラエル、そして諸国民の救いを実現することができるのです**」

ジャスターが「完成」と言うとき、何を意味しているのでしょうか。その答えは第10の柱の説明の中にあります。「私たちは、すべての真理を回復するために力を尽くしています。一致と力と純潔の内にあって、やがて来るメシアのからだの完成のために力を尽くしています」。ジャスターは、使徒3:21はキリストの再臨時に万物が回復することについて語っているという一般的な解釈にも従っていますが、同時に、この節はキリストの再臨の前にキリストのからだの一致が回復することを教えているという解釈にも立っています(別の箇所では、ジャスターはそれを「万物の回復につながる回復」と呼んでいます)。言い換えれば、ジャスターの解釈によると、回復は2度あることになります。1度目は主の再臨の前に成就する教会の回復、2度目は主が再臨した時に成就する万物の回復です。次の章では、ジャスターが、使徒の働きの教会は非常に高い水準に達したが、回復した教会が終わりの日に到達する「完成」には至っていなかったと教えていることを学びます。

2.2 現代のレストレーション(回復)

現代のレストレーション運動は、カトリック教会の暗黒時代に失われた使徒の時代の真理を回復しなければならないと言います。その主張によると以下ようになります。「カトリックが支配した中世の時代に、教会は千年間の霊的な昏睡状態に入った。使徒の時代に生まれた理想的な教会は次第に墮落し、ついにはカトリック教会の暗黒時代に霊的な活力を失うまでに至った。しるしや不思議、預言者と使徒の職、按手、聖霊のバプテスマ、異言、新生、浸礼といった初代教会に見られた霊的な働きは、カトリック教会が確立するにつれて失われていった」(この説明はかなり単純化していますが、レストレーションという概念を理解できるように提示しています)

現代のレストレーション運動によると、暗黒時代の教会の回復は16世紀の宗教改革に端を発します。宗教改革によって、カトリック教会の教義に対する信仰の宣言に代わって、霊的な新生という教えが教会に戻ってきました。アナバプテストは、滴礼と幼児洗礼に代わって、自分の意思で受ける浸礼によるバプテスマを回復しました。20世紀初頭のアズサストリートリバイバルでは、聖霊のバプテスマが回復しました。これについては後ほど詳しく取り上げますが、後の雨運動のリバイバルでは、使徒と預言者の職の回復、また主の再臨の前に成就する世界的な教会の一致が強調されました。そして最後に、新使徒的宗教改革(NAR)が、使徒職をメシアのからだを統治する機関として回復したのだと主張します。先述の通り、使徒職は終わりの時代の最後の世代に全世界の教会の一致を回復することを目的としており、それが実現する世代に主の再臨が起こるとされます。

また、現代のレストレーション運動によると、歴史上の諸運動は、失われていた真理を回復し、教会に真理を取り戻したが、新しい教派という形で分裂をもたらしたとされます。最初の宗教改革者であるマルチン・ルターの働きにより、ルター派が成立しました。アナバプテストの運動は、アーミッシュとメノナイト運動の形成につながりました。アズサリバイバルは、ペンテコステ運動を生み出しました。そのように、こうした諸運動は、失われていた働きと真理を教会に回復しましたが、教団教派という形で教会に永続的な分裂を生み出したとします。この現実には、教会が1つしかなく、使徒の権威と教えの下で一致していた使徒時代の教会とは対極的である、というのが彼らの主張です。つまり、現代のレストレーション運動の最終的な目標は、全世界の教会で、使徒の初代教会の頃のような完全な一致を回復することです。一致が回復し、分派がなくなれば、教会は傷もしみもない純潔の花嫁となり、そうやって初めてキリストがご自分の教会のもとに戻ってくることができるということです。(次号に続く)

イスラエル、王国、神の津波

シオンとの架け橋 石井田 直二

カルメル山上でユダヤ人と異邦人に伝道をする、ピーター・ツカヒラ師をお招きして特別セミナーを開催することになりました。福音のメッセージがアジアからエルサレムに帰って行く状況を解き明かす、スケールの大きなメッセージが語られることを期待し、準備を進めています。今回のセミナーで語られる予定の「王国」について、ツカヒラ師が以前に語られたメッセージの要旨をご紹介します。

■私たちの王は「平和の君」

イザヤ書 9 章 6 ～ 7 節には「平和の君」の預言があります。「平和の君」はヘブライ語ではサル(君主)・シャローム(平和)という2つの言葉から成り立っています。

まず、「君主」とは王である統治者です。聖書は神を、主権をもつ王として描きます。神の主権は、天だけではなく地上の全ての人々に及ぶのです。

だからイエシュアは、神の統治、神の国を私たちの優先順位の第一とせよ(マタイ 6:33)と教えられました。私たちの王はイエシュアです。私たちはみな、1つの王国で、このひとりの王、平和の君に仕えているのです。私たちはこの地上の政治にも関心をもつべきですが、その前に私たちの王イエシュアに忠実に従わなければなりません。これこそが神の国の一員の義務であり、神の国を第一に求めるということです。私は今日、誰に仕えるのか、誰を自分の統治者とするのか、その王は私に何を求めておられるのかを考え、彼に従わなければなりません。

そして、私たちの王は「平和」(シャローム)の王です。この言葉には「完全」「完成」という意味があります。それは、平和の君による公平と正義を通して実現します。ただ神のみが純粋な公平と正義を行うことがおできになるのですが、神の国の民であり、神に従う者である私たちもまた、公平と正義を行うように努めなければなりません。

神の国は、遠い未来のものではなく、私たちが今日行う決断に関係します。特に、他の人をどう扱うかが問題です。私たちは、周囲の人に公平と正義を行わなければなりません。私たちは、周囲の人に対して何らかの力をもっています。平和の君に従う私たちは、公正で正しいやり

方で自分の力を人と分かち合わねばなりません。それは私たちの心の中の最も小さな決断、最も小さな態度から始まります。

サウル王は、力を自分と家族だけに留めておこうとしました。だから、神に油注がれた若者ダビデが現れた時、脅威を感じて、その若者を殺そうとしたのです。もしサウル王がダビデと一緒に国を治めようとしたとしていたら、物事は違う方向に進んだことでしょう。

■平和の君イエシュアに従おう

私たちが自分を犠牲にして力を人に分け与え、ともに人生を歩む時に神の国が地上に来ます。小さなことから始めましょう。平和の君の御心に沿って物事を決断し、自分の力を手放し、人に分け与えるのです。そうすれば、神が私たちに注がれるシャロームは無限です。その最も偉大なお手本は、もちろんイエシュアご自身です。彼はご自分を無にし、卑しくし、正当に持っているものを手放されました。それは、私たちに力を与えるためでした。イエシュア「偉くなりたいと思う者は人のしもべになりなさい」(マタイ 20:26)と教えられました。

イエシュアの王国は私たち一人ひとりの生き方から始まります。最も重要なことは国の政治ではなく個人の生き方です。人生が終わった時に神から問われるのはあなたの生き方です。あなたはなぜあの時あのように決断したのか？なぜあなたはあの人をあのように扱ったのか？あなたは仕えようとしていたのか、それとも力を保持しようとしていたのか？このようなことが神の前で問われます。大切なのは、今日、平和の君を自分の王とすることです。平和の君をあなたの君主、主として生きてください。

「平和の君を王とする生き方」より

◀ピーター・ツカヒラ師 特別セミナー▶ 神の津波—イスラエル・王国



■日 時: 2019年5月10日(金)～11日(土) 全3セッション

10日 19:00～21:00 ①イスラエル

11日 9:30～12:00 ②王国 13:30～16:00 ③神の津波

■会 場: 大阪コロナホテル TEL: 06-6323-3151

533-0031 大阪府大阪市東淀川区西淡路1丁目3-21

JR新大阪駅東口から東へ徒歩2分 <http://osakacoronahotel.co.jp/>

入場無料・席上献金あり・予約不要 主催: シオンとの架け橋、聖書に学ぶ会



子羊の血と自らの証しのことばで勝利する執り成し人

アルコ・イリス・ミニストリーズ代表 早川 衛

読者の皆様にこのニュースレターが届く頃は、今年のラマダンが始まっていることだろう。そのような訳で、今回のテーマはイスラムとさせていただきます。イスラエルの周辺にはイスラム諸国がある。一部のイスラム組織は、ユダヤ人の殲滅を目標に掲げている。イスラム諸国は、福音が東からエルサレムに到達する障害となっている。このようなことから、イスラムは、反ユダヤ主義を拡大する力というだけでなく、神の計画実現を遅らせるものとも言えよう。

2014 年に出された文化庁宗務課宗務時報 (No.119) によれば、日本には約 80 のマスジド (モスク) がある。その一つ海老名マスジドの正面上部には「アッラーのほかに神はなく、ムハンマドはその使徒である」と記されている。このような事柄に対し、キリスト者は、何をどう祈ればいいのか。

クリスチャンの人生は、絶えず法廷に立たされているようなものではないだろうか。先日、証人として、ある裁判に立ち会い、そのように考えさせられた。筆者の正面には、裁判官が、右手には被告人と弁護人が、左手には被告人を責め立てる検事がいた。そのことをとおして、次のみことばが思い出された。

私は、大きな声が天でこう言うのを聞いた。「今や、私たちの神の救いと力と王国と、神のキリストの権威が現れた。私たちの兄弟たちの告発者、昼も夜も私たちの神の御前で訴える者が、投げ落とされたからである。」(ヨハネの黙示録 12 章 10 節) これは、法廷そのものである。神が裁判官、悪魔が検事、そして兄弟たちが被告人に相当する。

同 11 節には、**兄弟たちは、子羊の血と、自分たちの証しのことばのゆえに竜に打ち勝った。彼らは死に至るまでも自分のいのちを惜しまなかった、**と書かれている。悪魔は、兄弟たちの罪を指摘し責め立てるのだが、子羊イエスの血の力を信じる兄弟たちは「私たちは、子羊イエスの血で罪から救われた者です」と言う。また、悪魔の訴えに対し「それは嘘だ」と証言する。悪魔の言葉はすべて嘘であるため、裁判官である神は、悪魔の訴えを退けるのである。イスラムを覚え、イスラエルを執り成すためにも、この戦い方が有用であると思料する。

イスラムはムハンマドによって創始された。彼はメッカ近郊で、アッラーが唯一の神である、との啓示を受けたとされる。当時メッカは、多くの偶像が拝まれる地であり巡礼者で賑わっていた。その結果、市場が立ち、多くの物品が集まったのだが、多神教を否定するムハンマド

の啓示は、商人たちの商売相手である巡礼者の数を減少させる可能性があった。そのためムハンマドはメッカの商人たちに批判されメディナに移住することを余儀なくされた。しかし後に彼はメッカに攻め込み、陥落させた。このようにして、イスラム教が誕生したとされる。

当時メディナにはユダヤ人コミュニティがあったが、イスラム教徒たちと争いを繰返していた。それを解決するため、メディナ憲章と呼ばれる取り決めがイスラム教徒となったアラブ人とユダヤ人との間に結ばれた。しかし、その後も両者の間には問題が続き、ムハンマドは、ユダヤ人を迫害した。

その後成立したクルアーン (コーラン) は、次のような偽りで満ちている。(1) アッラーはイスラエルの子孫と契約を結んだ。そのため、彼らは、アッラーとの約束を果たすべきである。(2) ユダヤ人はアッラーによってファラオから救われたことを思い出すべきである。(3) イスラエルの民は、アッラーの啓示を改ざんした背信の民である。(4) ユダヤ教徒は、自らをアッラーの子と主張する。では、なぜアッラーは彼らの罪を罰するのか。(5) アッラーは不正の民であるユダヤ教徒を導かない。(6) ユダヤ教徒はアッラーに誓いを立てた。(7) ユダヤ教徒の行いは無益で彼らは失敗者となった。

また、クルアーンにはイエスやキリスト者に関する多くの記述があり、新約聖書を否定する。例えば、次のような内容が含まれている。

(1) イエスはアッラーの使徒である。イエスは十字架上で死んでいない。(2) 三位一体とイエスが神の子であることを否定。(3) キリスト者は、自らをアッラーの子と主張する。では、なぜアッラーは彼らの罪を罰するのか。(4) アッラーは不正の民であるキリスト教徒を導かない。(5) キリスト者は、アッラーに誓いを立てた。(6) キリスト者の行いは無益で彼らは失敗者となった。(7) イエスの弟子たちは、自らをムスリムであると証言した。

上記から、イスラムには、訴えと偽りという二つの特徴があると言える。これは、悪魔の特徴である。悪魔の訴えと偽りを退けるものは、子羊イエスの血に対する信仰と兄弟たちの証しのことばである。また、イスラムは、ユダヤ人とキリスト者を同じ理由で責め立てている。両者には、つながりがあり、メシアによって一致すべきであることを示しているのではないだろうか。反ユダヤ主義が打ち砕かれ、福音が圧倒的な勢いを持って東からエルサレムに到達するため、イスラムを覚え執り成し続けよう。



ヴァイオリンは主の栄光を喜び歌う2

ハティクバ・ミニストリー代表 高瀬 真理

今月はイスラエルのテル・アヴィヴ生まれのヴァイオリニスト。20世紀後半における最も偉大なヴァイオリニストの一人であるイサク・パールマンをご紹介します。現在70歳を超え、演奏においてのみならず、教育者としても高く評価されています。

筆者が彼の演奏を初めて聞いたのは、中学生のころ大阪のMホールでメンデルスゾーン作曲のヴァイオリン協奏曲を聴きました。

彼の両親は、ポーランドから移住したユダヤ系の理髪師でした。3歳の時、ラジオでヴァイオリンの演奏を聴いて感動し、ヴァイオリンに強い憧れを抱きました。最初はおもちゃのヴァイオリンを遊び半分で弾いていたが、間もなく正式なレッスンを受けるようになりました。しかし、4歳3ヶ月のとき、ポリオ（小児麻痺）にかかり、下半身が不自由になってしまうのです。それでもヴァイオリニストになる夢をあきらめず、幼少ながらシュミット高等学校でヴァイオリンのレッスンを続けました。その後、アメリカ＝イスラエル文化財団の奨学金を受けて、テル・アヴィヴ音楽院で研鑽をつみ、10歳で最初のリサイタルを開いたのです。これを機にエルサレム放送管弦楽団の演奏会に招かれ、大成功を収めたのです。

そんなパールマン氏が舞台袖から出てきたときに「衝撃」を受けたのです。なんと松葉杖をつき、全く動かない足が痛々しく、生意気にも足の踏ん張りがきかないから、音が十分に出てこないのではないかと…心配をする始末でした。コンサートマスターから楽器を受け取った彼の顔は満面の笑みで、見ているこちらまで楽しくなるような雰囲気でした。

協奏曲の序奏が始まり、最初の音色は、甘く、力強く、とても美しい物でした。筆者は身を乗り出すようにその演奏に聞きほれていました。そして、特に曲中で踏ん張りの必要な、力強い表現で聴衆に迫ってくる音色の必要な部分にさしかかった時、動かない足がなんと動いて、ヴァイオリンの音色をアシストしていたのには感動して、涙が溢れました。その後、筆者は彼の大ファンになり、その演奏スタイルと音色をまねて楽器を演奏している「つもり」になっていました。筆者の音楽演奏スタイルに大きな影響を与え、現在もその演奏スタイルは続いています。

彼の演奏を体験すると、旧約聖書の詩篇121篇を思い起こさせます。

私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。私の助けは、天地を造られた主から

来る。主はあなたの足をよろけさせず、あなたを守る方は、まどろむこともない。見よ。イスラエルを守る方は、まどろむこともなく、眠ることもない。主は、あなたを守る方。主は、あなたの右の手をおおう陰。昼も、日が、あなたを打つことがなく、夜も、月が、あなたを打つことはない。主は、すべてのわざわいから、あなたを守り、あなたのいのちを守られる。主は、あなたを、行くにも帰るにも、今よりとこしえまでも守られる。

主を主として信じ賛美する者は、まず神様がいの一番に「祝福」してくださる。人生の旅人である異邦の人もユダヤ人も変わりなく、その旅路が守られるのだと感謝しています。

余談ですが、1993年に「シンドラーのリスト」という映画が封切られました。

敗戦ムードが色濃くなった1944年、ナチスは証拠隠滅を謀ろうと収容所を閉鎖。残ったユダヤ人をアウシュヴィッツに送り込み虐殺しようとしていました。

殺したまま埋められていた死体も焼却処分のため掘り起こされています。このままプワシュフ収容所が閉鎖されてしまえば従業員たちは全員絶滅収容所に送られ虐殺されてしまいます。

ついにシンドラーは故郷チェコのプリンリッツにユダヤ人を連れていくことを決意しました。収容所の所長ゲートに多額のカネを握らせ労働力ともども工場の移転を承知させます。シュターンと結託してリストアップできたユダヤ人の数は1200人でした。

全財産を投げ打ち1200人ものユダヤ人の命を救ったシンドラーは感謝のしるしとして指輪を贈られます。指輪には「一人の人間を救う者は世界を救う」と刻まれています。

この「シンドラーのリスト」の主題を演奏していたヴァイオリニストこそイサク・パールマンなのです。彼は、この映画の後にも祝福され、後進の指導者としてJ音楽院の教授となり、指揮者として用いられています。

この主題の楽譜には、非常に難解な表記があり信仰者ならピンとくる言葉なのですが、曲の終わりの部分に「warmly・温かく」と記譜されているのです。それを見事に演奏しているパールマンの背後にはきっと…「**主は、あなたを、行くにも帰るにも、今よりとこしえまでも守られる。**」主がおられるのだと思いました。主は生きて今も働かれています。今月も一人でも多くのユダヤ人が救われます様に。シャローム

LCJEは、ユダヤ人伝道団体の情報交換ネットワークです。加盟しているユダヤ人伝道団体それぞれの立場・活動を尊重して、機関紙などに情報を掲載しています。しかし特定の立場・教理などを、LCJEとして支持するものではありません。読者におかれましては、個々の見識によって提供される情報を判断していただきますよう、お願いいたします。

2019年度祈禱会予定

場 所	6月	7月	8月	会 場
大阪(6:30より)	13日	11日	8日	北浜スクエア(VIP関西センター8F)
東京(1:30より)	8日	13日	10日	御茶ノ水クリスチャンセンター 8F 811号室

【大阪祈りにご参加される方へ】第二木曜日午後6時半開始です。5月は石堂女史をお招きし、特別集会を予定していますので第三週目になります会場はVIP関西センター8Fです。

【東京祈りにご参加される方へ】ご注意ください▶通常祈りの会場の、811号室ですが、変更される場合があります。階下の掲示板をご覧ください。

❖ LCJE 日本支部関西 春の特別集会 ❖

講師 石堂ゆみ師



石堂師は約30年前、エルサレムで看護師として働いていたときに信仰を持ちました。その後、米ニューヨークで看護師として働きながら、シオン聖書学院で学び、聖書学の修士号を取得。日本への使命を感じて帰国してからは、キリスト教のイスラエル支援団体「ブリッジ・フォー・ピース」(BFP)の日本支部で7年余り活動し、全国各地で講演してきた。

その後、2008年から母教会の加古川バプテスト教会から派遣されてイスラエルへ。現在はエルサレムから、イスラエルを中心とした中東と世界のニュースを「オリーブ山便り」で配信している。日本人クリスチャンとしては唯一のイスラエル政府公認ジャーナリストであり、同国政府公認ガイド、ヤドバシエム(ホロコースト記念館)公認ガイドの資格も取得されています。

<講演タイトル>.....

「イスラエル在住クリスチャン・ジャーナリストが語る 激しく揺れ動く イスラエル情勢」

2019年5月16日(木)

北浜スクエア8階 A室 18時開場 18時30分開演 一席上献金ありー

LCJE日本支部2019年3月度会計

収入・献金			支出・現金		
科	目	金 額	科	目	金 額
献	金	153,600	事	務 費	12,800
大阪祈り会席上献金		10,000	NEWSレター製作費		50,120
			郵便送 費		41,410
			郵便振替手数料		3,020
			通 信 費		5,500
			賃 借 ・ 管 理 費		21,600
			高 熱 費 ・ 共 益 費		9,400
			交 通 旅 費		7,000
			祈 り 会 経 費		14,000
合	計	163,600	合	計	164,850
			差 引 残 高		-1,250
前月よりの繰越		122,987	翌月への繰越		121,737

事務局よりのお知らせ

LCJE日本支部では、皆様からの声、そして証や、記事の御投稿をお待ちしています。インターネットでの御投稿、原稿用紙での御投稿いずれも大歓迎いたします。文字数は2000文字前後でお願いいたします。投稿記事は、封書で送っていただくか、LCJEJAPAN@HOTMAIL.COM 又は FAX 072-867-6721 まで。宜しくお願い致します。

編集後記

コ・ワーカーの皆様お元気にお過ごしでしょうか。今月も興味深い内容のニュースレターをお手元へ届けられる幸いを主に感謝いたします。読者の皆様今月号から半年間継続掲載される「NAR」に関する記事をご一読くださることをお願いいたします。LCJE日本支部として、またLCJE国際として、私たちの立ち位置をしっかりと神様から示していただきこの週末の時代を祈りつつ前進してゆきたいと願っております。

今月も、まだ主とお会いしていないユダヤ人には一日も早く主とお会いし救い主を受け入れ、救われます様にお祈りください。是非大阪祈り会、東京祈り会へもご出席くださり、イスラエルの平和を執り成しお祈りいたしましょう。コ・ワーカー一人一人に主の祝福がありますように。シャローム

LCJE日本支部事務局長 高瀬真理

LCJE日本支部は、皆様の尊い献金で支えられています。感謝